

講演3

熊本県における ハマグリが生息状況と 資源の利活用

逸見 泰久氏
(沿岸域環境科学教育研究センター教授)



ハマグリは私たちにとって古くから身近な食物であり、全国の縄文時代貝塚から大量に殻が出土しています。皆さんも、ハマグリを知らない人はいないと思います。実は、熊本県は、現在でも日本一のハマグリの生産県です。しかし、主要な漁場である緑川・白川河口域では、環境の悪化や乱獲によって、漁獲量が激減しています。

特に乱獲によるハマグリの資源枯渇は深刻です。熊本県では殻長3cm未満のハマグリの採貝を禁じる規則があるだけで、厳格な資源管理がなされていません。それは、緑川・白川に7漁協もあるため、漁協間・漁業者間の合意形成が難しいことも原因です。ちなみに、漁業は農業と違い、投資不要で適切な管理さえ行えば持続的利用が可能な産業です。つまり、魚介類は採り過ぎさえしなければ、勝手に増えてくれるのです。乱獲が漁獲量減少の主な原因であることから、資源管理を行うことが漁業者にとっても得であり、それを示すことが、改善の第一歩と考えました。

福岡県糸島市の加布里ではハマグリが激減した1993~1994年以降、厳格な資源管理が行われており、資源の回復に成功しています。加布里と白川を比べると、殻長6cm前後の大型のハマグリもいる加布里に対して、白川には殻長4cm以上の個体はほとんどいません。しかし、稚貝の個体数を調べると、年によっては白川の方が豊富でした。また、わずかですが白川の方がハマグリの成長がいいこともわかってきました。さらに、ケージで飼育するとほとんどのハマグリが死なないことより、漁場におけるハマグリの減少は漁獲によるものと推定されました。つまり、きちんとハマグリの漁獲を管理すれば、資源量が増加する可能性が高いのです。ただ、緑川・白川流域では7漁協が共同で採貝を行っていることが管理を難しくしています(加布里で採貝を行っているのは、糸島漁協のみです)。

現在、講演会などを通じて資源管理の必要性を説き、その結果、一部の漁協では禁漁区を設けるなど資源管理を行うようになりました。また、熊本県の漁業調整委員会規則で漁獲サイズを3.3cmまで引き上げることができました。

なお、球磨川流域のハマグリの減少は、乱獲ではなく干潟の泥化が原因である可能性が強く、そのため、河口域に覆砂を行うなどの取り組みが進められています。

講演4

持続可能な地域づくりと 体験型環境学習について

松崎勝己氏
(NPO法人きらり水源村)



私たちの地域菊池市の「水源地区」は人口1,000人ほど、約300世帯の集落で、菊池川上流に位置し、近くには菊池渓谷もある自然豊かな小さな里山です。4市町村が合併によって約60人の生徒がいながらも閉校を迎えたことをきっかけに、地域でNPOを立ち上げようとスタートしました。

1950年に建てられた木造校舎のうち、一部は改修せずに廃校の活用事例の発表などに使い、そのほかは農林水産省「やすらぎ空間整備事業」で改修(剣道場が宿泊棟、音楽室が食堂など)し、地域の農産物や加工品を販売したり、食事を提供するなどの取り組みを行っています。

取り組みの一つである「自然体験プログラム」については、高齢者の皆さんの力を活用しようと「きらり人登録制度」を設定。体験指導者に認定された竹細工や料理、釣りの名人など約60人の「きらり人」が、体験活動を支えています。最近では「水源フットパス」を一緒に歩いてコースを選定したり、2014年夏には、井出をカヤックで下る「イデベンチャー」も開催し、200人程体験してもらうことができました。

また、「水源手仕事こし活動」では、“きらり人”のスキルアップや仲間を増やすため、大分に研修へ行ったり、技術を忘れないように1カ月に1度は集まって活動しています。子どもを対象にした「農業体験プログラム」では、毎月農業体験を提供。毎年、夏にはスペシャルキャンプを開催し、1週間親元を離れてこの集落で活動し、農業体験のほか、食事を自分たちで作るなど行っていますが、1週間で子どもたちの顔つきや心まで変わっていくので、私たちも楽しみです。

そのほか、料理上手なお母さんたちで加工部をつくり、郷土料理の保存や研究を進めています。平均年齢は70歳前後で「水源ばあば」という愛称で呼ばれています。また、若手中心の「水源MISO味噌団」も結成し、双方連携しながら、食を守る取り組みも行っています。

年々、地域のニーズが変わり、高齢化に伴う福祉事業や農地を守る活動が求められており、高齢者の見守りを兼ねた宅配弁当サービスや集落営農の取り組みなどもスタートしました。そのほか、農産物を生かした新商品の開発や耕作放棄地を再生する取り組み、新規就農者を受け入れなどの事業を通して、年間活動予算3,500万円前後の推移で地域経済的活性化につなげています。

▶パネルディスカッション

豊かな自然・社会環境創生のための協働について

4人の講演者へ質疑応答形式で行われたパネルディスカッション。キックオフシンポジウムに訪れた関係各所や一般市民の方々、学生の皆さんと活発なやりとりが繰り広げられました。

パネラー 堂蘭 俊多 氏(国土交通省八代河川国道事務所長)
皆川 朋子 氏(大学院自然科学研究科准教授)
逸見 泰久 氏(沿岸域環境科学教育センター教授)
松崎 勝己 氏(NPO法人きらり水源村)

モデレーター 田中 尚人 氏(政策創造研究教育センター准教授)



田中:まずは、堂蘭さんへの質問を「日本野鳥の会熊本県支部」の高野さんお願いします。

高野:球磨川下流域のアユをはじめとする魚が棲む水環境の再生、中でも「八の字堰」の復元は素晴らしい取り組みだと思います。そこで、河口域に生息する鳥たちを含めた自然の保全あるいは河口域の改修についてご意見をお伺いさせていただきます。

堂蘭:現在、私どもでは、“生物ワーキンググループ”を組織しており、専門家と同行して現地調査し、その後もフォローアップし、関係者へフィールドバックするなど、取り組みの評価も含めて、専門家と常に協働するというルールの下で進めています。

水生生物・昆虫や水際の植物なども含めて調査していますが、実は、鳥の専門家の方は参加しておられません。関係する皆さんにも相談しながら、鳥に対する視点も入れ、ぜひ挑戦してみたいと思います。

田中:佐渡ではトキが世界遺産や環境保全の



キーワードになっていて、人々と自然環境の結びつきの象徴になっています。ぜひ高野さんからアドバイスをお願いします。

高野:海・干潟・海岸では、魚を捕食する鳥が生態系の頂点に立つ生き物ではないかと思えます。鳥たちが来るところは良い自然環境だという事を念頭に置いて工事に携わっていただければうれしいですね。

田中:鳥の生態系を私たちももっと勉強する必要がありますね。では若者を代表して、熊本大学の河野さん、「八の字堰」について、いい質問をありがとうございます。



河野:「八の字堰」は、すごく良い構造だと思えますが、「一文字堰」と「八の字堰」のコストの差が気になりました。

堂蘭:「一文字堰」とは要するに最短距離で川を堰止めて造りますが、それに比べれば「八」は斜めで長い分コスト増だといえるでしょう。今回のコンセプトは、上流で生じた人の頭大の岩や小砂利を下流の埋立地などに廃棄す

るよりも、川の中で使う方が生物のためになり、遠くに運ぶよりは近くで使う方がコスト的にも安くなることから、ぜひ土砂を有効活用して、「八の字堰」を再構築しようという取り組みです。マスコミにもコストについては丁寧に説明していますが、近い将来訪れるであろう会計監査にも対応できるよう、意識しながら進めています。

田中:地域資源を活用し、生態系にも配慮するなど、公共事業も一挙両得を考える時代といえますね。

では皆川先生への質問では、政創研の安部先生にマイクをお渡しします。

安部:上流から下流まで連続性の回復という言葉が印象に残りました。私の専門である防



災分野でも、洪水対策も上流・中流・下流域を一つにして考える必要がありますが、魚類の保全や河川的环境保全の取り組みで、上流から下流までを一つの流域とした取り組みの事例はありますか？

皆川:アユを例に挙げると、河口で生まれて海で成長し、遡上した後は川で過ごして、また海へ下って産卵します。アユは、川のどこかに障害物があるとえさ場まで行けないこともあり、“川が連続していなければ生息できない生き物”です。現在、“川の連続性”が重要であることに着目し、アユをシンボルフィッシュとして、川を保全する取り組みが、各地で行われています。連携という点では把握できていませんが、白川ではこれから上・下流の連続性を修復する取り組みを展開する予定です。

堂蘭:球磨川流域では“ゴミリレー”の旗を作